

過疎地に暮す身体障害者に対する生態学的探求： ヘルスプロモーションの観点から

著者	丸山 東人
学位授与年月日	2015-02-18
URL	http://doi.org/10.15083/00009191

審査の結果の要旨

氏名 丸山東人

本研究は、過疎地に暮らす身体障害者を対象として、身体障害当事者の生活状況と心の健康状態、居住地とそこでの生活に対する考えの把握を試みた研究である。過疎は元々住民の生活とその福祉を低下させる可能性があり、健康教育学や公衆衛生学の分野における重要な課題の一つである。これまでも過疎地の住民の生活、健康に関する調査は行われてきたが、現在の我が国の過疎地では、都市部への人口の移動、高齢化、少子化、社会資本の規模縮小が進行しており、さらなる調査・研究が必要である。特に過疎地の住民の中でも、障害者はそのような過疎進行の影響を大きく受ける可能性があり、その生活状況や心の健康の把握は重要な課題である。しかしこれまで過疎地の研究の中で、障害者に焦点を当てた調査研究は数少なく、その意味で本研究は先行性の高い試みと考えられる。また方法論として、本研究では質問紙調査による量的研究と、インタビューを活用した質的分析とを併用して解析・考察を進めており、その意味でもユニークな研究と考えられる。

論文の構成と内容は、研究の背景と目的について述べた第1章に続き、第2、第3章で量的解析の結果を示し、第4章でその結果を考慮しつつ質的分析を行い、最後に第5章に全体としての考察を述べている。具体的には第2章では当事者と近隣住民との関係、地域参加の状況、地域への愛着感、保健福祉関係者など行政との関係、医療機関利用に関する状況などの生活状況全般の把握を試み、地域に根付いた密度の濃い人間関係の役割の重要性等を見出した。第3章では自己効力感、首尾一貫感覚、不安/抑うつに関する既存の尺度および健康行動に関する質問を用いて、心の健康の実態について検討を行った。その結果、自己効力感の低さと不安/抑うつの強さともに、知人・近隣との行き来と生きがいの有無が首尾一貫感覚に影響していること等が示された。第3章では当事者の障害に関する語りの質的分析から、当事者に共通するものの見方や考え方、行動様式や意味づけを明らかにすることを試みた。その結果、1. (自分の) 土地への愛着と肯定感情をもち、自分の生活様式を確信、生活を不便と感じつつもそれを寛容的に評価し、新しいものを取り入れつつも伝統を遵守しながら生活していることが示された。2. 当事者は、時に悲観感情、健康と健康不安、自立と孤独のはざままで悩みつつも、障害の現状を認識しつつ、人生経験に基づく強さや生きる意味づけをよりどころに生活していることが示された。3. 暮らしの支えとして、家族の機能と友人の存在、また部落の共同体意識が有効に機能しており、行政の支えについても失望もありながら感謝と更なる期待をもちながら生活していることが伺われた。1-3についての考察は、論文の内容の要旨で図示されたとおりである。なお本研究には対象規模など諸々の限界はみられるものの、論文ではそれらについても十分な考察と言及がなされており、先述の先行性、独創性ととともに、学術論文として一定水準以上に達したものと判断された。よって博士(教育学)の学位にふさわしい論文であると評価された。